

子宮がん検診（施設）

動 向

平成25年度における子宮がん施設検診受診者は、頸がん17,429名（前年度比137名減）、体がん774名（前年度同数）で、受診者総数は前年より減少した。また頸がん受診年代は40歳から59歳が8,875名で全体の50.9%で、体がんの40歳から50歳は578名で74.8%が締めている。20歳代の受診者は10%に満たない状況である。

子宮頸がん検診において実施されている細胞診ベセスダシステムは世界中で実施されている子宮頸がんスクリーニングの評価方法である。このベセスダシステムの分類は異常の程度をより正確に伝えることができると考えられている。

毎年3月1日から3月8日は「女性の健康週間」と定め、女性の健康づくりを国民運動として展開している。期間中は全国でさまざまなイベントや活動が開催されている。若い世代の方にも「子宮がん予防」「子宮がん検診」「治療方法」などの理解を深め、検診の必要性を説いていく必要があると考える。

結 果

（1）子宮頸がん検診

平成25年度の子宮頸がん検診受診者数は17,429名であった。年齢階級別受診者数は40歳代が最も多く28.6%であり、次いで50歳代22.4%、30歳代17.9%の順であった。子宮頸がん、異形成の発生頻度が高いとされている29歳以下の受診者の割合は7.7%と極めて低く、若い世代の受診を促す方策が望まれる。初診の割合は総数で24.8%あり、前年と同数の結果であり、年齢階級別では、29歳以下が17.1%、30歳代が25.8%、40歳代が30.8%であった。がん患者の発見には、初診率の向上も必要である。子宮頸部細胞診の要精検率0.75%、要再検率1.61%、両者合わせた要再精検率は2.35%であった。再精検受診者410名の中から、子宮頸がん17名と異形成50名（軽度33、中等度10、高度7）が検出された。

子宮頸がん発見率は、再診では0.05%であるのに対して、初診で0.23%と高く、初診の受診者から多

くのがんが発見された。年齢階級別では、29歳以下0.15%、30歳代0.13%、40歳代0.14%、50歳代0.13%、60歳代0.00%、70歳代0.00%であった。若年令に多くのがんが発見されており、若年令層の検診率の向上が必要である。発見された頸がん17例の病期は0期14名、腺癌1名、病期不詳2名であった。

異形成発見率は0.29%（初診0.23%、再診0.31%）であり、年齢階級別では、20歳代0.37%、30歳代0.35%、40歳代0.40%、50歳代0.23%、60歳代0.13%、70歳代0.09%であった。若い世代の検診の必要性を示している。

（2）子宮体がん検診

子宮体がん検診受診者数は774名で、子宮頸がん受診者数の4.44%であった。平成23年度が1044名、平成24年度が774名であり、かなり減少した。平成18年度にがん検診指針が改正され、不正性器出血などの有症状者及びハイリスク者は、第一選択として医療機関の受診を勧奨することになった。そのため施設検診での子宮体がん検診受診者数は激減している。774名の受診者の中から、要再検1名、要精検9名（疑陽性8、陽性1）が検出された。この10名の精密検査が施行されたが、子宮体がんは2名見られた。

年齢階級別に見ると、子宮頸がん検診受診者と異なり、子宮体がん検診受診者は比較的高齢者に多く、50歳代43.0%、40歳代31.7%、60歳代16.0%、30歳代4.7%、70歳代4.5%の順であった。子宮体がんが見つかった2名は、40歳代と50歳代が1名ずつであった。

（3）卵巣がん検診

平成22年度の受診者数は265名で、内訳は一次検診206名、二次検診59名であった。一次検診206名の中、卵巣腫瘍が判明した人が9名（4.4%）あり、二次検診に移行した。二次検診では、問診、内診、経膈超音波検査、腫瘍マーカー採血などで、定期的に卵巣腫瘍の経過を観察している。

関係の集計表は88頁に掲載